

発達障害のある幼児・低学年児童への社会的スキル訓練

—自由遊び場面における短期維持効果の検討—

学校教育学専攻

臨床心理学コース

M09067C

半田 健

問題と目的

これまで発達障害児に対して、社会的スキル訓練(以下,SST)が実施され、社会的スキル獲得の効果を明らかにしている(佐藤, 2002 ; 野口・佐藤, 2004)。

発達障害児への SST 研究の課題として訓練効果の維持が挙げられ、岡田・後藤・上野(2005)や吉田・井上(2008)の研究から、ゲームでの行動リハーサルを取り入れた SST は、訓練効果の維持を促進させると考えられる。また、幼児や低学年児童を対象とした研究では維持を検討しているものが少ない現状にある。

以上のことから、本研究では発達障害のある幼児と低学年児童にゲーム場面での行動リハーサルを取り入れた小集団 SST を実施して、訓練終了から 1 カ月後における訓練効果の維持について検討することを目的とする。

研究 I

1.目的

本研究では、発達障害のある幼児・低学年児童 3 名に対して、SST の訓練効果とその維持について検討することを目的とする。また、ゲーム場面と自由遊び場面のスキル獲得の結果の違いについても検討する。

2.方法

1)対象児

A 児 : 年長男児(PDD 5 歳 9 ヶ月)、B 児 : 年長女児(PDD・LD 6 歳 3 ヶ月)、C 児 : 小学 1 年生男児(知的障害 7 歳 3 ヶ月)の計 3 名を対象とした。

2)手続き

(1)ターゲットスキルの選定

社会的働きかけ(物のやりとり、温かい言葉かけ、質問スキル)とその応答を選定した。

(2)SST

K 大学附属相談施設で週 1 回 1 時間のゲームでの行動リハーサルを取り入れた SST を全 6 回実施した。また、対象児が SST で学んだスキルを家庭で実行することで強化が与えられるホームワークを実施した。

3)効果測定

(1)行動観察

Pre、SST、Post、Follow up のゲーム場面の 10 分間と自由遊び場面の 5 分間を対象とした行動観察を行った。行動観察は、対象児同士の働きかけと応答の生起回数を測定した。

(2)保護者評定とアンケート

Pre、Post、Follow up に対象児の保護者に対して新版 S・M 社会生活能力検査を行った。評定は意思交換と集団参加を対象とした。また、Post と Follow up において対象児のスキル実行と、スキル実行への保護者の対応についてアンケートを行った。

3.結果

1)行動観察

ゲーム場面では、全ての対象児において働きかけと応答の生起回数に訓練効果がみられ、Follow up においても A 児の応答以外は Post の生起回数を維持していた。自由遊び場面では、全ての対象児の働きかけと応答において訓練効果がみられたが、Follow up では、Post の生起回数を維持していなかった。

2)保護者評定とアンケート

保護者評定は、A 児と C 児の意志交換と集団参加の得点、B 児の意志交換の得点に訓練効果とその維持がみられた。また、アンケートは、全ての対象児が家庭で教示したスキルを実行していたこと、また、全ての保護者が対象児のスキル実行に対して手がかりや強化を与えていたことが報告された。

4. 考察

本研究では、ゲーム場面と家庭場面において対象児の訓練効果とその維持がみられた。しかし、自由遊び場面では訓練効果しかみられず、維持はみることができなかつた。そのため、自由遊び場面での維持を促進する手続きとして、荒木・石川・佐藤(2007)の「社会的スキルの獲得を促す SST の訓練要素」と、「訓練場面以外でのスキル実行とそれに対する強化環境」の視点から、1)ターゲットスキルとして応答スキルも重点的に教示する、2)学校場面でスキル実行を促して強化するホームワークを導入することが必要であると考えられる。

研究Ⅱ

1. 目的

本研究では、発達障害のある低学年児童 5 名に対して、研究Ⅰの SST と、改善点として挙げた 1)と 2)の手続きを取り入れ、自由遊び場面での訓練効果の維持について検討することを目的とする。加えて、対象児の担任教師に社会的スキル評定とアンケートを実施して学校場面でのスキル実行についても検討する。

2. 方法

1)対象児(全て小学 1 年生)

D 児：男児(PDD 6 歳 11 ヶ月)、E 児：男児(PDD 6 歳 9 ヶ月)、F 児：男児(PDD 疑 7 歳 3 ヶ月 #2 欠席)、G 児：女児(知的障害 7 歳 5 カ月)、H 児：男児(知的障害 7 歳 2 カ月)の計 5 名を対象とした。

2)手続き

(1)ターゲットスキルの選定

上手な話の聞き方と、社会的働きかけ(エントリースキル、物のやりとり)とその応答を選定した。

(2)SST

研究Ⅰの手続きに加えて、学校場面で SST で学んだスキルを実行することで保護者からトークンと賞賛、次回の SST でトレーナーからトークンのバックアップ強化子と賞賛が与えられるホームワークを実施した。

3)効果測定

(1)行動観察

Pre、SST、Post、Follow up の自由遊び場面の 5

分間を対象に研究Ⅰと同様の行動観察を行った。

(2)教師評定とアンケート

Pre、Post で対象児の担任教師に対して磯部・佐藤・佐藤・岡安(2006)の児童用社会的スキル尺度(社会的スキル領域)を行った。ただし、学校の都合上、E 児と H 児の評定は実施できなかった。また、Post で担任教師に対象児のスキル実行についてのアンケートを行った。

3. 結果

1)行動観察

全ての対象児に訓練効果があり、H 児以外の 4 名の対象児は Follow up において維持がみられた。

2)教師評定とアンケート

教師評定は、D 児は「働きかけ」と「仲間強化」以外全ての項目、F 児は全ての項目、G 児は「仲間強化」以外全ての項目に得点の増加がみられた。また、アンケートは、全ての対象児が学校場面において学んだスキルを実行していたことが報告された。

4. 考察

本研究は、自由遊び場面において 5 名中 4 名の対象児に維持効果が確認された。また、教師評定とアンケートから対象児が学校場面においてもスキルを実行していたことが確認された。また、維持がみられなかつた H 児は、遊びのレパートリーが少なく他児と異なる遊びを行うことから、他児との社会的相互作用を行う場面が減少していた。そのため、対象児によっては、遊び方のコーチングなども必要になると考えられる。

Ⅳ 総合考察

本研究では、発達障害児を対象とした SST 研究の課題として挙げられた幼児や低学年児童を対象として SST の訓練効果の短期維持を確認するという目的を達成したと考える。本研究の限界と課題としては、Pre と Post、Follow up を 1 回しか評定できていない点が挙げられる。今後、Pre や Post、Follow up の評定回数を増やして追試する必要があるだろう。また、本研究の今後の展望としては、訓練効果の長期的な維持や、般化についても検討していく必要があると考える。

主任指導教員 大野裕史
指導教員 岡村寿代